余命一ヶ月の北郷一刀

ヒーロー好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作られた外史。終端を迎えた物語も、望まれれば突端に開かれて新生する

しかし、それが幸せの物語とは限らない

これは余命一ヶ月の宣告を受けた北郷一刀の物語

一ヶ月という短い時間、無双の姫たちと北郷一刀はどのように過ごすのか

そしてどのような最期を迎えるのか

これは悲しき外史の物語である

目　次

プロローグ　1
呉編・一話　10

プロローグ

生があれば死がある

どんな事にも終わりの時が来る時があります

人間も例外ではありません

しかし、それがいつ終わるんでしょうか？

明日？一週間？一年後？十年後？いやもっと先かもしれません

しかしそれは本人にも他人にもわかりません

けど、もし

自分が

家族が

親友が

そして愛する人が

後、一ヶ月しか生きられないと宣告されたら

貴方はどのような行動をしますか？

そしてどのような気持ちになりますか？

悲しき気持ち？悔しい気持ち？なぜ！っという疑問？

その時の気持ちは人それぞれです

これは外史の一つである悲しき物語

余命一ヶ月を宣告された北郷一刀の物語である

一ヶ月という時間の中で、北郷一刀は愛する人と、どのよう過ごすのか

そして、無双の姫たちはどのように過ごしていくのか

近づいてくる最後の時

どのような最期を迎えるのか

さあ、外史の突端を開きましょう

オリ主と会話

「作者のヒーロー好きです。いつも小説を読んでいただきありがとうございます」

「「ありがとうございます!!」」
「うお!!なんで翼と勇作が」
「新しく小説を投稿するって勇作さんが言ってたから…来た」
「勇作君…覇気で心を」
「うん」
「はあ…まあ、いいけど」
「それよりさ、何でこれの小説を書こうとしたの？」
「…いやさ」
「ただの思いつきでしょう」
「ちょ!!」
「思いつきって」
「すまん、事実だ」
「これ、下手すれば炎上ものだと思うよ」
「確かにそうかもしれないよ。けど例えそうでも、俺は書く」
「はあ」
「感動するほどの内容になるかどうかわからないけど」
「それでどんな内容にするの？」
「決まっているのは…魏、呉、蜀のエピローグがあるじゃん」
「うん」
「時間的にその次の日に一刀が倒れて、そこで余命宣告を受けるって感じだな。それぞれ違う形で宣告するようにする」
「へー」
「革命キャラも出さないし、呉は本編では死亡するキャラする孫策と周瑜も一刀のお蔭で生存していることにする」
「なるほど」
「それぞれ、全5話で終わるようにする予定だよ」
「キャラごとに書かないの？」
「うん、そこまでの内容を書けるほど、力ないと思うから」

「そうなんだ」
「それのいいけど、俺が主人公をしている『真・恋姫†無双～外史の運命を破壊する者～』もしっかりお願いしますよ」
「わかってるよ」
「俺の『ＴＶ版恋姫†無双・・・覇気と六爪流を使う転生者』のほうもよろしくおねがいしますよ」
「了解だ！」
「「お願いします」」
ｏｒｚ
「そこまでしなくても……では、失礼します」

呉編・一話

「う…う……」
　此処はとある外史
「昨日は子供たちの遊んだお蔭で、体中が痛い」
　ベットの上で一人の男が動けないでいた
「こんなの久しぶりだな」
　そんなコトを思っていると
「……起きてる？」
　部屋に誰が入ってきた
「……起きてるけど、体が動かないよ…蓮華」
「まったくだらしないわね…一刀」
「しょうがないだろう…娘たちと遊んだんだから」
「もう…とにかく、これから会議があるから急ぎなさい」
「わかった」
　そう言うと部屋を出る蓮華
「ふう……さて、何とか起きないと」
　そう言うと、ベットから起き上がるのあった

　彼の名は北郷一刀。突然、三国志に似た世界にやってきた学生である。しかし少し違うは三国志の英雄が殆ど、女性であることだ。先ほどの女性は孫権である
「ふう、ここに来てから随分と時間が経った」
　彼は、天の御使いとして彼女らに保護される代わりにある条件と出された。孫呉に天の御使いの血を入れる事。つまり種馬になれということだった。
「さてと、行くか」

それから、さまざまな出会いをし、恋をし、戦に勝ち、そして、愛する人との間に子供が生まれたのであった
「…ぐっ」
と途端にふらつく一刀。そして胸を抑える
「……何だ今のは……まだ疲れが取れていないのかな」
そう思いながらもその場を後にしたのであった。だかこの時彼は知らなかった。あのような事を告げられることになるとは

「遅くなった」

一刀はある部屋に入った
「遅いわよ」
そこには蓮華をはじめとする呉の重鎮たちがいた
「ごめん」
「もう」
「蓮華、それぐらいにしなさい」
「そうよ！いつまで経っても始められないわよ」
「そうね…では、これから会議を始めます」
「はっ!!」

「では、これで会議を終えます」
「はあ、終わった」

「だらしないぞ！北郷」
「ごめん、思春」
「まあ、いいじゃないですか。昨日は子供の世話で疲れているのですから」
「そうですよ」
「穏、明命」
「大丈夫ですか」
「何とかね」
「こういう時は酒を飲めば元気になるぞ」
「亞莎、祭」
「お酒！なら私も付き合う」
「はあ、まったく」
「冥琳、雪蓮」
「大丈夫？一刀」
「ほら、これから仕事あるでしょう」
「小蓮、蓮華」
一刀の周りに愛する人たちが集まる。それぞれで交流を始める。
その様子を見て
「(これがずっと続けばいいな)」
心の中でそう思うのであった
「…さて、仕事頑張るか」
と立ち上がろうとした……その時

ドクン!!

「ぐっ！」
胸の強烈な痛みが走る
「うっ！」
「か、一刀!!」
その場にうずくまる
「ゲホ!!ガハ!!」

激しい咳が起こり、口を押える
「ゴホ!!……何…だ…こ…れ」
口から手を離すと、手のひらに血がついていた。そしてその場に倒れた
「か、一刀!!」
「おい!!」
「医者を!!」
「は、はい！」
「呼んできます!!」
「し、しっかりしなさい！」
皆を声を聴きながら、一刀は意識を失った